

令和5年度 ICT を活用した授業改善研究指定校報告書 城山中学校

1 学校の課題

※データ等を基にした学校の課題

- (1) 授業中に「困り感」を抱える生徒が一定数いるため、すべての生徒が「わかる」「できた」と思える授業展開や課題設定が必要である。
- (2) (1)を展開するために基盤となる情報機器の取り扱いや情報発信などの情報モラル教育が必要である。
- (3) 全教員が同じように ICT 機器を取り扱うことができるような研修計画の作成が必要である。

2 研究主題

主体的に学び、協働して自らの課題を解決していく生徒の育成
～ ICT を効果的に活用した授業づくり ～

3 取組内容

※1の課題解決に向けて、重点的に取り組む項目とその具体

(1) 「わかる」「できた」と思える授業展開や課題設定のために

- ・教師は、育成すべき力や課題をしぼり、生徒の興味関心を引き出すような導入を工夫し、簡潔で短い言葉で指示や説明をする。
- ・小グループの活動時間を保証する。
- ・生徒の活動時は、机間巡視し、どこまでわかっているのかを見極める。
- ・生徒と教材を、生徒同士を、生徒自身の中で「つなぐ」ために、ICT を活用する。
- ・学年や教科の特性だけでなく、生徒の実態に応じた ICT の活用方法などを検討し、授業力の向上を目指す。
- ・生徒が生徒に説明する授業が、最も力がつく。そのために、学習支援ツール「ミライシード」のを積極的に活用し、効果的な方法を見出す。
- ・既存の長期休暇の課題は、紙媒体で行われていたが、ドリルパークを活用することで、生徒の課題進捗状態も、即時にわかることができ、学校へ登校してきた際などに、より具体的な学習支援ができる。これらの取組を組織的に行うために情報教育担当者を中心とした研究体制の構築、並びに校内研修会(年3回)、学年授業研修会(年4回)を設定する。

(2) 情報活用能力(特にタイピングスキルと情報モラル)の育成のために

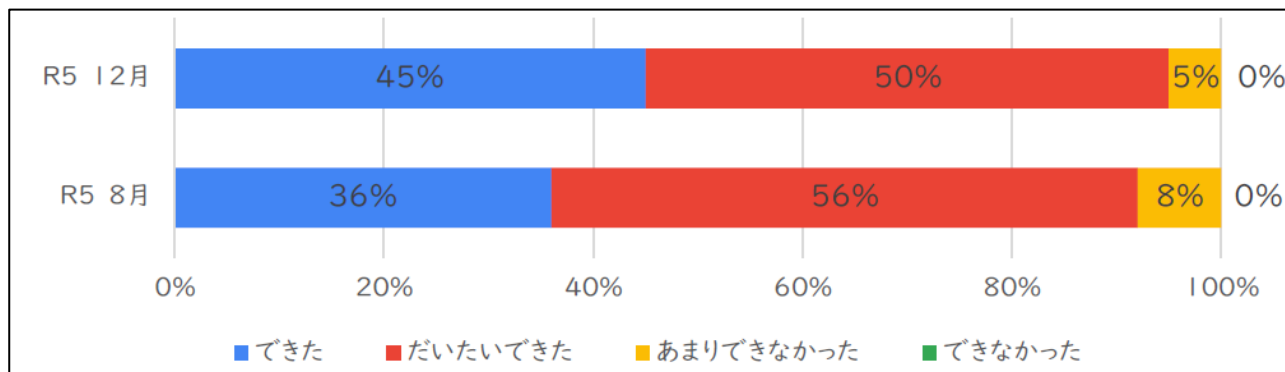
- ・生徒は、入力時に思考を止めないよう、10本指を使ったタイピングスキルの向上を目指す。月に一度の測定会を実施するとともに、タイピング強化週間を設定し、タッチタイピングの習得に向けた取組を実施する。
- ・年度初めのタブレット開き時にルールブックを用いて、ルールの確認をするとともに、生徒会とも協力してモラルの向上に向けた取組を行っていく。

(3) 教員の ICT 機器の取扱スキルを高めるために

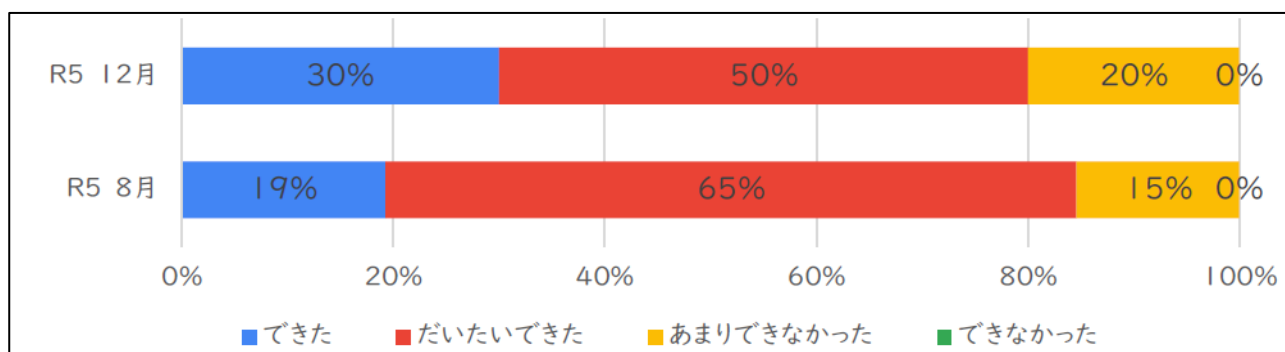
- ・教師自身が、教育支援クラウドサービスや教育支援システムの効果的な使い方について、校内研究会を機会に操作方法を工夫するとともに、それぞれの教科の特性に合わせたシステムの活用方法を検討する。

(1) 学校評価アンケート（教師）

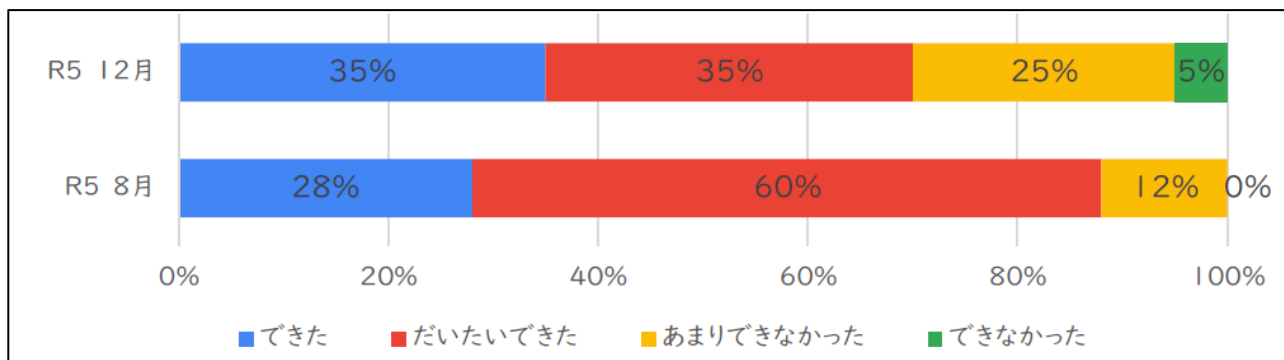
① 教師は、授業のねらいをしぼり、簡潔で短い言葉で指示や説明をしましたか。



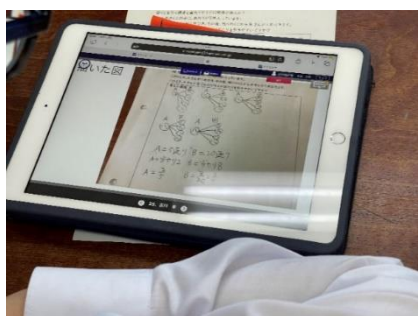
② 生徒が生徒に説明する授業ができましたか。



③ 生徒と教材を、生徒同士を、生徒自身の中で「つなぐ」ために、ICTを活用しましたか。
(視覚支援、学習支援ツール「ミライシードのムーブノート・オクリンクの活用等」)

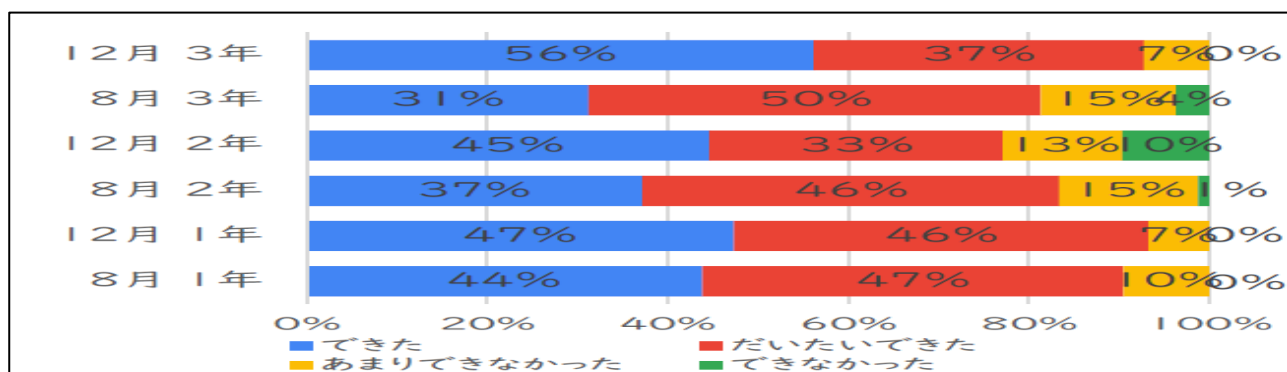


それぞれの項目で「できた」と回答した教師の割合が増加している。

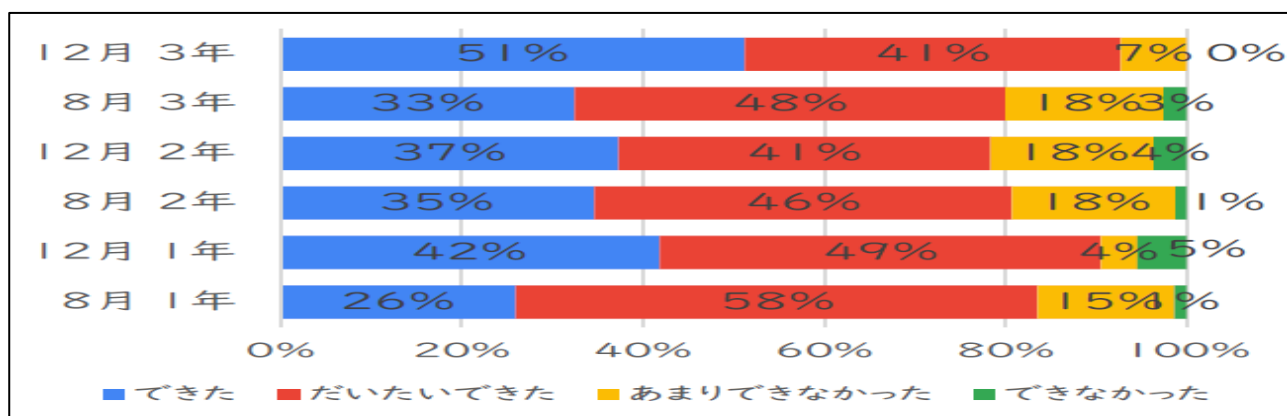


(2) 評価アンケート（生徒）

① ICT（タブレット、パソコンなど）を使って、調べたことを基に、考えたことをわかりやすく、伝えることができましたか。



②学級の生徒との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができましたか。



生徒の ICT 操作スキル向上などにより、タブレットを使用した授業が多く実践されるようになり、「できた」と感じている生徒が多くなっている。

(3) 操作スキルの向上

	6月	7月	9月	10月	11月	平均
1年	42.1	44.7	59.5	50.6	56.8	50.7
2年	50.9	54.6	63.9	51.6		55.2
3年	57.2	56.1	64.0	51.8	57.2	57.2

5 研究成果

(1) 成果

- 4(2)①・②より、1・3年生において、表現する力が向上し生徒同士で話し合う活動を充実させることができた。「困り感」をもった生徒は、分からない内容を他の生徒と共有することで、自らの学びにつなげていくことになる。校内研修会等を通して、授業展開や課題設定の仕方など意識統一を図ったことで、このような個別最適な学びと協働的な学びの充実を図る際の基盤となる力が身につくにつれある。

ミライシードの活用について、特に、特別な教科 道徳において、教材にあった使い方について検討することができた。ベースとなる使い方が出来てきたので、より各教科での活用が行


いやすくなった。

また、長期休業中の課題として、ドリルパークを有効に活用することができた。ドリルパークを活用することで、生徒の課題進捗状態を即時にわかることができ、学校へ登校してきた際などに、より具体的な学習支援ができる。生徒自身も ICT を活用したドリル教材を活用

・ドリルパークの活用 有効な活用方法を見出す。

長期休みの課題として提示

数 学	①3年製の初まごめ問題集P.107まで ②5章の習字 ③ドリルパーク「円」 ※第3回定期テストの範囲です。正答できるまで繰り返し取り組みましょう。
理 科	①「よく分かる理科の学習」本誌P90～P111 ②課題配信してあるドリルパーク(解答を100%にする)
英 語	①ドリルパーク 1年【12】【13】【14】 2年【11】【12】【13】で、 新たなターゲットになっているところをターゲットにする ②3年製の秘宝埋問題集(英語) (年間計画通りです) 「書きこみノート」の36～40ページを解き、答え合わせ(コメント記入まで)をして提出



することは学習意欲の向上につながり、課題の提出率も非常に高かった。また、実践した教師は紙媒体よりもドリルパークを活用した方が提出状況や取組の程度などを、短時間で確認し、評価できるという利点を実感し、来年度も継続し、実践していくことが考えられる。ドリルパークで課題を配信できる教科については、引き続き実施していきたい。

- 昨年度から引き続き“タイピング測定会”“タイピング強化週間の設定”を行ってきた。それによって、1分あたりの入力文字数が増加させることができた(4(3))。特に、1年生は6月当初には3年生との差が5。1文字だったのが、11月には0。4文字にまで縮まった。タイピングスキルは ICT を活用した授業展開を進めていくうえで思考を止めないために必要な能力である。休憩時間などで個別に練習している姿を見ることができた。
- 4(1)③より、視覚支援やミライシードのムーブノート・オクリンクの活用等について「できた」と回答した教員が増加した。これは、校内研修会でそれぞれの教科の特性に合わせたシステムの活用方法を検討した成果である。

(2) 課題

- 4(1)③より、ICT 活用が「できた」と回答した教員は増えた一方、「あまりできなかった」「できなかった」と回答した教員も増加しており、教員間でスキルの差が生まれている。今後は、教員が生徒役となり、実際にオクリンクやムーブノートを使って意見交流するなどして、具体的なイメージを持てる研修を行う必要がある。
- 生徒会を中心にタブレットの使い方について見直しを進めてきた。“学習のために使う”

という大原則の中、生徒が活用しやすい環境づくりを行ってきたが、成長段階における段階的な指導が必要である。学年学級委員会や学年班長会などを実施し、生徒の自治の力により改善しようと考えたが、2学年では使用の制限をかけた。来年度に向けて、成長段階における指導方法について検討するとともに、“魅力ある授業の創造”において授業改善を進めていきたい。

タブレット見直しキャンペーン 生徒会

- ▶ 中央委員会(学級委員)の前期の反省から、タブレットを休憩中、授業中に正しく使用できていない人が多いという課題が多くのクラスで出ました。その反省を受けて、正しくタブレットを使用することを目的に行いました。
- ※具体的に正しくない使用とは、タブレットでゲームをする、youtube を見る、授業に関係のないことを検索することです。
- ▶ 同時に、タイピングの関する取り組み、ドリルパークの活用の取り組みを実施した。(休憩時間等にタイピングの競いあつたりする姿を見ることができた)
- ▶ 生徒会(生徒)が主体となり始めた取り組みですが、一定の成果が出たと思う。
- ▶ 何より、“なんのためにタブレットを利用するのか?”を生徒自身の問いにすることができたのではないのでしょうか。

広島市立福山中学校